

松平容保まつだいらかたもり
(榛葉竹庭しんばちくてい)

偏期忠益護皇京 更舉義戈當銳兵

頸領終生挂宸藻 一身甘負逆臣名

偏ひとえに 忠益ちゆうえきを 期きして 皇京こうけいを 護まもり

解説 松平容保は十二歳で会津藩、藩主容敬の養子となり、文久二年十二月、尊王浪士の蹟属する京都に守護職として赴任した。六年後の鳥羽・伏見の戦いに敗れ、將軍慶喜と共に江戸に帰ったが、引き続き鶴ヶ城に拠って最後の抵抗を試みた。然し、力及ばず敗れて因幡藩に幽閉された。

更さらに 義戈ぎかを 舉あげて 銳兵えいへいに 當あたる

語釈 ※松平容保 幕末の大名。会津藩藩主。京都守護職。血統的に

は水戸藩主・徳川治保の子孫。 ※忠益 眞心を尽し世の益となること。

※皇京 京都。天皇がいる都。 ※義戈 義によって起す兵。 ※銳兵 一

えりぬきの強い兵隊。 ※頸領 くび。 ※宸藻 天皇の作られた歌。

孝明天皇の御製「たやすからざる世に、武士の忠誠のこころをよるこ

びてよめる」

一いっしん身 甘あまんじて 負おう 逆臣ぎやくしんの 名な

通釈 世に益せんとして眞心を尽して京都を護り、更に義兵を挙げて

精銳な政府軍に相對した。彼は生涯孝明天皇の御製を袋に入れて首に

掛け、逆臣の名に甘んじたのであった。